



Vor 10 Jahren, kurz nach dem Tod meines Vaters, trat das Orchester Nipponica an mich heran. Damals kannte ich weder das Orchester noch die Pläne meines Vaters, mit ihm ein Konzert in China durchzuführen. Umso überraschter war ich, dass das Orchester zum Gedenken meines Vaters dieses Konzert selbst organisieren und durchführen wollte. Das Konzert, das im Oktober 2004 in Peking stattfand, war ein großer Erfolg, für das ich dem Orchester Nipponica und den beteiligten Musikern sehr dankbar bin.

Ich war daher glücklich zu erfahren, dass das gleiche Orchester Nipponica zum 10. Todesjahr meines Vaters das heutige Konzert durchführen würde. Das Programm deckt in schöner Weise den Grundgedanken seines Schaffens ab, den er selbst mit 「西の響き・東の響き」 zusammenfaßte: Von der westlichen Musikwelt, in die ihn sein Lehrer Akira Ifukube einführte, über die 「西」 und 「東」 in Spannung setzende Werke "Black Intention I" und "Afro Concerto", bis hin zum Werk von CHAN Ming Chi, das für Maki Ishiis Hinwendung zu China in den letzten Jahren seines Lebens steht. Für ihn lag in China seine musikalische "Zukunft", vielleicht eine Neudefinition der 「西の響き・東の響き」.

Im Namen der Familie Maki Ishiis danke ich allen Beteiligten ganz herzlich für das heutige Konzert.

Kei Ishii (Sohn von Maki Ishii)

10年前、私の父の死のすぐ後に、私はオーケストラ・ニッポニカと出会いました。その時私は、中国でそのオーケストラが父と一緒にコンサートを行うという父の計画を知りました。このオーケストラが私の父のコンサートの計画を実行しようとしていることに、私は驚きました。北京で2004年10月に行われたコンサートは大成功でした。オーケストラ・ニッポニカと関わった音楽家の皆様に大変感謝しています。

私は、同じオーケストラ・ニッポニカが父の没後10年を記念して本日のコンサートを行うことを、とても嬉しく思っています。本日のプログラムは、父の仕事の総括であり父の仕事の基本的な考え方である「西の響き・東の響き」というコンセプトを見事に表現しています。恩師である伊福部昭先生に導かれて入った西洋音楽世界の作品に始まり、「西」と「東」の間の緊張の上に創られた『ブラック・インテンションI』と『アフロコンチェルト』を経て、晩年の父が志向した中国の作曲家である陳明志氏の作品に至ります。父にとって中国は彼の音楽の「未来」であり、おそらく「西の響き・東の響き」の再定義の場所だったのでしょう。

石井眞木の家族を代表し、今夜のコンサートのすべての参加者の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

石井 敬 (石井眞木長男)

芥川也寸志メモリアル

オーケストラ・ニッポニカ第23回演奏会

没後10年 石井眞木へのオマージュ

●石井 眞木 ISHII Maki (1936-2003)

「交響的協奏曲」オーケストラのための (1958) 初演
Kôkyôteki Kyôsôkyoku(Symphonic Concerto) for Orchestra
Andante - Moderato - Allegro - Lento - Moderato - Allegro - Molto vivace

●陳 明志 CHAN Ming Chi (1961-)

「御風飛舞」In the memory of Ishii Maki (2013) 委嘱作品・初演
Yùfēng fēiwǔ ~ In the memory of Ishii Maki

—休憩—
intermission

●石井 眞木 ISHII Maki

ブラック・インテンションI~1人のリコーダー奏者のための 作品27* (1976)
Black Intention I for one Recorder player Op.27

●伊福部 昭 IFUKUBE Akira (1914-2006)

交響譚詩 (1943)
Ballata Sinfonica
Prima Ballata: Allegro capriccioso
Seconda Ballata: Andante rapsodico

●石井 眞木 ISHII Maki

打楽器とオーケストラのための
アフロ・コンチェルト 作品50 ヴァージョンB** (1982)
Afro-Concerto for Percussion and Orchestra Op.50 - Version B

指揮：野平 一郎 NODAIRA Ichiro, Conductor
打楽器：菅原 淳 ** SUGAHARA Atsushi, Percussion
リコーダー：鈴木俊哉 * SUZUKI Tosiya, Recorder
管弦楽：オーケストラ・ニッポニカ Orchestra Nipponica, Orchestra
ゲスト・コンサートマスター：奥村 智洋 OKUMURA Tomohiro, Guest Concertmaster

2013年7月14日(日) 14:30 開演
東京四谷・紀尾井ホール
2:30p.m., Sunday, July 14th, 2013 at Kioi Hall (Tokyo, Yotsuya)

助成：公益財団法人 芸術文化振興基金 芸術文化振興基金助成事業
公益財団法人 花王 芸術・科学財団
協力：石井 敬 / 司東 玲実
打楽器協力：API 東京打楽器レンタルサービス
主催：芥川也寸志メモリアルオーケストラ・ニッポニカ
このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです

※曲目および曲順は都合により変更する場合がございます

— <http://www.nipponica.jp/> —

ISHII MAKI'S PROFILE

石井眞木(1936-2003)は、日本のモダン・ダンス、舞踏の草分けの舞踊家故石井漢の三男として1936年(昭和11年)東京で生まれた。父親の名前を冠したバレエスタジオが自宅に隣接するという家庭環境から、幼少よりクラシック音楽に親しみ、ピアノ、バイオリンを学ぶ。中学2年で国立音楽大学附属中学に編入してから、同附属高校卒業まで、専門的に音楽の基礎を学ぶ。高校卒業後は作曲の道を目指し、東京で伊福部昭他に作曲を学んだ後、1958年に渡独、ベルリン音楽大学作曲科にて、ボリス・ブラッハー、ヨーゼフ・ルーファー等に師事。1959年、当時の前衛音楽の中心地であったダルムシュタットの「現代音楽のための夏期講座」等に参加し、西ヨーロッパでの作曲活動をスタートさせたが、1961年12月、父親の病氣重篤の報に接し帰国。その後、東京を中心に現代音楽の分野で活発な作曲活動を行う。1969年、西ベルリン市の「芸術家プログラム(DAAD)」の招きで再渡独。以降、2003年に甲状腺癌によって没するまで、ベルリンと東京の二都を本拠に作曲家、指揮者、音楽祭企画者として精力的に活動した。



1970年代から日本を代表する作曲家の一人として、国際的な現代音楽シーンで常に演奏発表の機会に恵まれ、パリ、ベルリン、ジュネーブ、東京、大阪、ハーグ、ニューヨークなどで、＜石井眞木特集＞のコンサートが開催されている。

石井の初期の作品群には、東京とベルリンで学んだ西欧の前衛技法の影響がみられるが、1960年代後半に日本の伝統音楽に着目して以来、西欧的技法と日本の伝統音楽の要素による＜二つの音世界からの創造＞が生涯のテーマになり、2003年に没するまで、作品番号で125に及ぶ数多くの作品を発表した。

指揮者としての石井は、主に自作品や自身の企画したコンサート、音楽祭、テレビ番組等でタクトを振ったが、中でも自身で指揮をした自作のバレエ「輝夜姫」(ネザールランド・ダンス・シアター・バレエ団/振付:イリ・キリアン)は、1988年の初演以来、世界各地で90数回にわたり上演され、大きな成功をおさめた。ちなみに本年(2013年)2月には、パリ・オペラ座バレエ団により「輝夜姫」全14回の公演が、パリ・オペラ座バスターニーユに於いて行われている。

石井は国際的な音楽祭の企画者、オーガナイザーとしても積極的に活動し、1960年代から日独現代音楽祭、パンムジーク・フェスティバル、メタムジークフェスティバル、ホリゾンテ・フェスティバル、＜東京の夏＞、日中友好合作現代音楽祭等で主たる役割を務めた。

1977年『モノプリズム op.29』で「尾高賞」を受賞したのをはじめとして、「中島健蔵音楽賞・大賞」、「ドイツ批評家賞」、「京都音楽賞大賞」、「日本伝統文化振興賞」等を受賞。また1999年秋には「紫綬褒章」を受章している。

2013年6月、石井眞木公式サイト (<http://ishii.de/maki/ja/profile/>)、その他資料に基づき作成(文責:司東玲実)

石井眞木年譜(1936～2003)

西暦(和暦)年齢	出来事と作曲あるいは演奏された主な《作品》
1936(昭11)0	5月28日日本の近代舞踏の草分け石井漢(1886-1962)の三男として東京に生まれる。
6～13歳	リトミック、ヴァイオリンを習う。石井漢舞踊団と共に北東アジア旅行。宮内庁で雅楽体験。
1950(昭25)14	国立音楽大学付属中学ヴァイオリン科2年に編入。
1952(昭27)16	国立音楽大学付属高校ピアノ科入学。学外で池内友次郎・外崎幹二に和声学・対位法を学ぶ。
17～18歳	学外でコハンスキーにピアノを、渡邊暁雄に指揮を学ぶ。
1955(昭30)19	高校を卒業し、伊福部昭に自由作曲を学ぶ。
1958(昭33)22	《交響的協奏曲》作曲。ベルリン音楽大学作曲科入学。自由作曲をブラッハー、12音技法をルーファー、対位法をベピング、和声法をハルティツヒに学ぶ。
1960(昭35)24	自作《小オーケストラのための7章》op.2が小澤征爾指揮ベルリンフィル室内合奏団によりベルリンで初演。 在学中ダルムシュタット国際現代音楽夏期講座、パイロイトの国際ユークレント音楽祭等に参加。《9奏者のための前奏と変奏》op.1、《4つのバガテルン》op.3
1962(昭37)26	前年末帰国、1月父死去。9月「石井眞木作品演奏会」開催。
1963(昭38)27	「第5回現代音楽祭・京都」参加。「ドイツ大使賞」受賞。《アフォリズメン》op.5
1964(昭39)28	「第4回東京現代音楽祭」参加。《絞首台の歌》op.6
1965(昭40)29	初めて電子音楽をNHK電子音楽スタジオで制作。《波紋》op.9
1966(昭41)30	聲明を初めて聴く。
1967(昭42)31	「第1回日独現代音楽祭」を入野義朗、福島和夫、諸井誠と企画構成、開催。以降毎年企画構成担当。
1968(昭43)32	「明治百年記念芸術祭・奨励賞」受賞。《響応》op.13
1969(昭44)33	「ベルリン芸術家プログラム」の招聘で渡独、ベルリン(西)に居を構え日独往復生活に入る。《響層》op.14、《螺旋I番》op.15、《2人の打楽器奏者を伴うマリンバ曲》op.16
1970(昭45)34	「日本の前衛'70」(室内楽コンサート)をベルリン芸術週間企画構成(ブリュッヘン他出演)。《遭遇I番》op.18で尺八とピアノが＜遭遇＞。
1971(昭46)35	東京音楽企画研究所(TOKK)設立、副所長。「現代音楽のフォーラム」企画構成。《遭遇II番》op.19で雅楽とオーケストラが＜遭遇＞。《螺旋II番》op.17
1972(昭47)36	《遭遇II番》でアメリカ公演旅行。「ロワイアン国際現代音楽祭」参加。
1973(昭48)37	「TOKKアンサンブル」「聲明」「平家琵琶」欧米公演旅行。「日本との出会いフェスティバル」(ケルン)企画構成に参加。《ボラリテーテン》op.22
1974(昭49)38	「ワルシャワの秋」フェスティヴァル、ベルリン芸術週間、スイス現代音楽祭等に参加。
1975(昭50)39	佐渡ヶ島で初めて鬼太鼓座を聴く。「TOKKアンサンブル」東南アジア公演旅行。《ディポール》op.19b、《オーケストラのための序》op.26

1976(昭51)40	「日独現代音楽祭」を継承する「第1回パンムジーク・フェスティヴァル」企画構成、開催、以降毎年企画に関わる。「第1回現代演奏コンクール」開催。米国滞在。「TOKKアンサンブル」東・西欧公演旅行。「第2回メタムジーク・フェスティヴァル・ベルリン」で鬼太鼓座を初めてヨーロッパに紹介。《ブラック・インテンションI》op.27、《モノローム》op.28、《モノプリズム》op.29。
1977(昭52)41	《モノプリズム》で尾高賞受賞。「ミュンヘン国際音楽コンクール打楽器部門」審査員。
1978(昭53)42	「TOKKアンサンブル」南米・米公演旅行。テレビ番組「オーケストラがやってきた」(TBS)の司会担当(約2年間)。「第1回インゼル・ムジーク」(ベルリン現代音楽祭)企画構成。《面(おもて)》op.35、《失われた響きII》op.33
1979(昭54)43	新日フィル定期で自作以外の作品を初めて指揮(ワグナー《タンホイザー》より、ほか)。「ミッテルブルグ現代音楽祭」(オランダ)に参加。
1980(昭55)44	「石井眞木特集(室内楽)」ベルリン現代音楽祭にて。「入野義朗追悼演奏会」で追悼作品《彼方へ》op.41初演(高橋アキ)。《熊野補陀落》op.42
1981(昭56)45	「ジャパン・イン・ベルリン」の「石井眞木コンサート」で《モノプリズム》ヨーロッパ初演。「ケルン・パーカッション・フェスティヴァル」参加。
1982(昭57)46	「第16回パンムジーク・フェスティヴァル」企画構成(第14回から日独現代音楽祭の通算回数に変更)。《アフロ・コンチェルト》op.50
1983(昭58)47	「石井眞木作品演奏会(室内楽)」「石井眞木の世界(管弦楽)」「石井眞木コンサート」開催。《時の閃き》op.54
1984(昭59)48	《輝夜姫》op.56の公演でオランダ公演旅行。《蛙の声明》op.61初演。
1985(昭60)49	「第1回く東京の夏>音楽祭」を船山隆、江戸京子と企画構成・開催、以降の回も関わる。《輝夜姫》バレエ版初演。
1986(昭61)50	「インヴェンション・フェスティヴァル」で《蛙の声明》ヨーロッパ初演。「近代舞踏の烽火」(石井漢、山田耕作生誕百年記念)企画構成。中島健蔵音楽賞受賞。
1987(昭62)51	「石井眞木作品演奏会(打楽器の世界)」(ベルリン)。「石井眞木の個展」(ベルリン・インゼル・ムジーク現代音楽祭)。「第2回ジャパン・イン・ベルリン」のプログラム構成担当。《琅琅の響き》op.76
1988(昭63)52	ドイツ批評家賞受賞。「伊福部昭先生の叙勲を祝う会」で《幻の曲》を献呈。オーケストラ・アンサンブル金沢のコンポーザー・イン・レジデンスに一柳慧と就任。《桃太郎征妖魔(おにたいじ)》op.80
1989(平成元)53	「作曲家の個展'89石井眞木」(サントリー音楽財団)で《オーケストラのための風姿》op.84初演ほか。
1990(平2)54	石井眞木作品集(管弦楽)(都響日本の作曲家シリーズ8)で《響層》《祇王》ほか。「アジア音楽祭'90」実行委員長。《水伝説》アメリカ公演。
1991(平3)55	新交響楽団「現代の交響作品展'91」で《解脱》ほか指揮。バレエ《輝夜姫》オランダ・パリ公演。「石井眞木の世界(室内楽)」(神奈川芸術祭)で《ピアノ曲「北・銀・夜(冬)」》op.93初演ほか。
1992(平4)56	新交響楽団「現代の交響作品展'92」で《浮游する風》ほか指揮。「石井眞木作品集(管弦楽)」(オランダ・パーカッション・フェスティヴァル)で《アフロ・コンチェルト》ほか指揮。
1993(平5)57	「第43回ベルリン芸術週間」で《浮游する風》ほか指揮(新交響楽団)。
1994(平6)58	《交響譚詩「龍玄の時へ」》op.100
1995(平7)59	《聲明交響》op.105、《飛天頌歌》op.106
1996(平8)60	「日中友好合作日本現代管弦楽作品音楽会<東京の響きin北京>」開催、中国放送交響楽団を指揮、《飛天頌歌》中国初演。
1997(平9)61	「日中友好合作現代音楽祭in北京1997」開催。《飛天生動III》、《人間如夢》op.110
1998(平10)62	新国立劇場オープニング記念公演で委嘱作品・バレエ《梵鐘の聲》op.108上演。
1999(平11)63	室内オペラ《閉じられた舟》op.113、ハーグで初演。紫綬褒章を受章。
2000(平12)64	《閉じられた舟》日生劇場で公演。
2001(平13)65	《人間如夢III》op.121
2002(平14)66	「伊福部昭米寿記念演奏会」で《扇の舞》ほか指揮。北京・上海公演旅行。交響詩《幻影と死》op.125
2003(平15)66	4月8日没。7月《幻影と死》読響定期で初演。

石井眞木編著『西の響き・東の響き 石井眞木の音楽 ― 二つの音世界からの創造 ―』(音楽之友社、1997)掲載の「石井眞木年譜(音楽歴)」ほかから作成

打楽器でお困りですか？

きっとお役に立ちます。

API

東京打楽器レンタルサービス

www.tokyo-dagakki.com

info@tokyo-dagakki.com

tel. 044-789-9146 fax. 044-789-9147

PROFILE

指揮：野平 一郎
NODAIRA Ichiro, *Conductor*



1953年生まれ。東京藝術大学、同大学院修士課程作曲科を修了後、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に学ぶ。作曲、ピアノ、指揮、プロデュース、教育などの多方面にわたる活動を行う。

ピアニストとしては内外のオーケストラにソリストとして出演する一方、多くの内外の名手たちと共演し、室内楽奏者としても活躍。古典から現代までレパートリーは幅広い。マヌリヤベンジャミン、松平頼則の作品を世界初演、またリゲティ、武満徹

作品他の日本初演を行う。また東京シンフォニエッタの初代代表を務めた。

80曲以上に及ぶ作品の中にはフランス文化省、アンサンブル・コンタンポラン、IRC AM、ベルリンドイツ交響楽団、国立劇場その他からの委嘱作品がある。2002年に東京でエレキギター協奏曲「炎の弦」をステーブ・ヴァイのソロで、また2005年にはドイツでオペラ「ドルガーダ」をケント・ナガノ指揮で、2006年には東京でチェロとオーケストラのための「響きの連鎖」を初演。2012年6月パリでサクソフォンとコンピューターの作品を世界初演。

第13回中島健蔵音楽賞(1995)、第44回尾高賞、芸術選奨文部大臣新人賞、第11回京都音楽賞実践部門賞(1996)、第35回サントリー音楽賞(2004)、第55回芸術選奨文部科学大臣賞(2005)、第61回尾高賞(2013)を受賞。また2012年には紫綬褒章を受章。現在静岡音楽館 AOI 芸術監督、東京藝術大学作曲科教授。

打楽器：菅原 淳
SUGAHARA Atsushi, *Percussion*

大阪生まれ。7才よりマリンバを始める。大阪府立天王寺高校卒業。東京芸術大学卒業。フランス政府給費留学生として、パリ・コンセルバトワールに留学。J. ドレクリューズ、S. グアルダの両氏に師事。これまでに、小川雅弘、小川順子、故小宅勇輔、有賀誠門、



岡田知之、高橋美智子の諸氏に師事。

1974年、ラ・ロッシェル国際打楽器コンクール第1位。グループ「3マリンバ」、アンサンブル「ヴァン・ドリアン」を結成、作曲家に曲を委嘱し、数多くの日本初演をする。1980年、パリで行われた国際打楽器コンクールの審査員を務める。

1983年、中島健蔵音楽賞を受賞。

1996年、平成7年度文化庁芸術祭において、「菅原淳リサイタルー木と皮の鼓動を求めて」の企画、演奏に対して芸術祭優秀賞を受賞。

その後、打楽器アンサンブル「パーカッション・ミュージアム」「パーカッション・ギャラリー」を結成し、その主宰でもある。

1999年、朝日現代音楽賞を受賞。

今までに「一柳慧とジョン・ケージ」「石井眞木とシュトック・ハウゼン」「高橋悠治とクセナキス」「ティンパニ・リサイタル」など響きを追及したリサイタルを開催。

2000年、カナリア諸島音楽祭において、石井眞木作曲「アフロ・コンチェルト」を、ゲルト・アルブレヒト指揮、読売日本交響楽団と共演。2007年6月、テーリヘン作曲「ティンパニ協奏曲」を下野竜也指揮、読売日本交響楽団と共演。

CD「菅原淳／木と皮の鼓動」「花と星」をリリース。パーカッション・ミュージアムのCDもキングレコードより4枚、JPCより7枚リリースしている。

38年間、読売日本交響楽団で主に首席ティンパニ奏者を務めた。

現在、東京音楽大学教授。日本大学芸術学部講師、昭和音楽大学特別講師、尚美コンセルヴァトアール・ディプロマ講師。

リコーダー：鈴木 俊哉
SUZUKI Tosiya, *Recorder*

アムステルダム音楽院卒業。リコーダーを花岡和生、W.ファン・ハウヴェに師事。リコーダーの可能性と技術の開拓に取り組む。L. コーリ、B. ファーニハウ、L. フランチェスコニ、原田敬子、細川俊夫、伊藤弘之、野平一郎、S. シャリーノ、湯浅譲二といった作曲家たちと共同作業をおこない、彼等の作品を初演する。ウィーンモデルン、チューリッヒ新音楽の日、ガウデアムス、ダルムシュタット、ISCM世界音楽の日々、秋吉台、パリの秋、武生、ロワイヨモン、コンボージアム、ヨーロッパ・アジア国際現代音楽祭、クランクシュプーレン、トンヨン、フェスティバル・ア・



テンポ、メルボルン R.C. オープニングフェスティバル、ルーマニア国際現代音楽祭、アジアゴ音楽祭、サントリーサマーフェスティバル等の音楽祭にソリストとして参加。ヨーロッパ、アメリカ、アジア各地で現代奏法に関するワークショップやリサイタルを行う。2001年より笙の宮田まゆみとデュオを組む。2002年のダルムシュタット夏期講習会講師。東京都交響楽団、セントラル愛知交響楽団等と共演。

ソロCD「Tosiya Suzuki Recorder Recital」はドイツの音楽ジャーナル、音楽と美学協会より Music & Ästhetik Interpretationsprize 2003を受賞。名古屋市民芸術祭賞(1994)、ダルムシュタット奨学生賞(1994)、クラーニヒシュタイナー賞(1996)、第24回中島健蔵音楽賞、第1回創造する伝統賞を受賞。
www.tosiyasuzuki.com/

ゲスト・コンサートマスター：奥村 智洋
OKUMURA Tomohiro, *Guest Concertmaster*

鷲見三郎、堀正文、江藤俊哉、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫、フェリックス・ガリア各氏に師事。1984年、第53回日本音楽コンクールで第1位・増沢賞を受賞。ジュリアード音楽院に留学。1990年、カーネギー・ホールでラロのスペイン交響曲を弾いてニューヨークにデビュー。1993年、ナウムバーグ国際ヴァイオリン・コンクール優勝。以来、全米各地及び日本国内の主要オーケストラと共演。

現在国立音楽大学附属中学校・高等学校非常勤講師。

PROGRAM NOTE

解説

最初に、“行動する作曲家”石井眞木(1936～2003)への理解を深めるために、彼の父である舞踊家・石井漢(1886～1962)について述べなければならない。

【日本近代舞踊の先駆者・石井漢】

1925年(大正14)のことである。文豪・谷崎潤一郎(1886～1965)は石井漢の舞踊について次のように書いた。「これに反して公會堂における石井漢兄妹の舞踊は、實に寂しいものであった。第一見物が非常に少ない。踊り手は漢君と、小浪嬢と、十一二歳の少女だけである。そして彼等は、たゞピアノだけの音楽を用ひ、簡素な衣裳で、黒幕を垂れた背景の前で踊るのである。しかし私は見てゐるうちに、その深みのある象徴的な表現に全く引き入れられてしまった。いふまでもなく漢君の舞踊は日本固有の舞踊とは違ふ。その技巧は西洋から取つたものであり、伴奏の曲目も西洋のものではあるけれども、中に盛られた感情は純粹に東洋的である。私はこれこそ日本人の獨創になる眞に新しい舞踊だと思つた。殊に『マスク』『奇妙』などいふ作品が表はすユーモアの感じは、全然今までのどの舞踊にもなかつたものだ。小浪嬢の『惱ましき影』や『夢みる』の持つ暗示的な優婉さ、『音楽なき舞踊』と題する二つの習作の理想的な力強さ、～中略～それらは一として東洋人の悩みを語り、われわれの心に惻々として訴ふところの何物かを藏せぬはない。思ふに石井君は藝術家として、今や油の乗り出した得意の境地にあるのであらう。私は近年、これほどの驚異と感激をもつて觀たものはなかつた。石井君があらゆる貧苦艱難と闘ひ、これだけ自己の藝術に向かつて努力精進しつゝある間に、自分は何をしてゐたかと思ふと、顧みて忸怩たるものがあつた。」(谷崎潤一郎全集第23巻「西洋と日本の舞踊」中央公論社1983)谷崎は同じ年の生れの石井漢を絶賛している。

漢が創作舞踊家として初めて舞台上立ったのは1916年6月のことで、それは劇作家・小山内薫(1881～1928)と、作曲家・山田耕筈(1886～1965)によって設立された移動劇団「新劇場」の第一回公演であった。演劇以外の演目として、山田耕筈の作曲、振付による舞踊詩「日記の一頁」と、メンデルスゾーンの曲に山田が振付した「ものがたり」が上演された。帝国劇場で開催されたこの公演の入場者数は29人と伝えられていて、運営的には惨憺たるものであったが、その中に小山内の力を借りて雑誌第二次「新思潮」を創刊した谷崎潤一郎がいた。谷崎は漢の軌跡を見守っていたのである。山田耕筈がベルリン国立高等音楽院(当時)・ホッホシューレへ留学した1910年前後のドイツは、音楽や物語や衣装に従属されない身体性を取戻そうとする「ノイエタンツ」(新舞踊)が、アメリカからヨーロッパに渡ってきたイサドラ・ダンカン(1878～1927)の影響の下に盛んになりつつあった。それは同時代の華やかなディアギレフのバレエ・リュスによる総合芸術の理念とは対極に位置するものであった。リズムを身体運動の基礎に取り入れたエクササイズを創りだしたスイスの作曲家・エミール・ジャック＝ダルクローズ(1865～1950)は、ドレスデンの郊外ヘレラウにダルクローズ舞踊学校を設立し、ノイエタンツに影響を与えた。ダルクローズ舞踊学校は大きな注目を集め、ディアギレフ、ニジンスキー、ラーバン、スタニスラフスキー、山田耕筈、秦豊吉、小宮豊隆等が訪れている。

山田耕筈はノイエタンツをベルリンから日本へ持帰り、舞踊劇や舞踊詩という分野を構えて作品を作曲し、ダルクローズのリトミックの教則本を基に、自ら試行錯誤して石井漢に振付を行ったのであった。ちなみに、絵画、建築、パフォーマンス、小説、演劇、童画などの各分野で驚異的な活動を行った天才マヴォイスト村山知義がドイツからノイエタンツを持ち帰り、漫画「のらくろ」の作者・高見澤路直(田河水泡)らと舞踊活動をしたのは1923年から24年にか

奥平 一

けてのことである。山田と漢の活動の先駆性が理解できるであろう。時代は、自由でのびのびとした創作活動へ向けて沸騰していた。

1922年、漢は同い年の舞踊家・アレクサンドル・サカロフ(1886～1963)の存在を知って“清新な力強い道が開けるのを感じ”(石井漢「私の顔」モダン日本社1940)、おのれの舞踊の実力を試すためにヨーロッパへ渡ることを決意する。同年11月に帝国劇場で開催された「石井漢渡欧記念舞踊公演」のために、山田は舞踊詩「野人創造」を作曲して振付けをした。二年間にわたってヨーロッパとアメリカを廻って成功を取めた漢は、帰国後三鷹の武蔵境を経て荏原郡衾(ふすま)、現在の自由が丘に「石井漢舞踊研究所」を構えて新たな舞踊運動を展開する(「自由が丘」という地名は漢の命名によっている)。精力的に日本全国を巡業して著名となり、戦後は石井眞木の作曲の師であった伊福部昭(1914～2006)の舞踊曲『さまよえる群像』『人間釈迦』などで大衆的にも名声を博した。

【行動する作曲家・石井眞木】

石井眞木(以下、石井と表記する)は、漢の三男として生れた。長男の歓(1921～2009)は作曲家であり、漢の実弟・五郎も山田耕筈や成田為三に師事した作曲家である。実は漢が故郷秋田から上京した動機も作曲家になることであった。石井が作曲を志したのは必然であったのかもしれない。1958年、彼は山田耕筈が学んだ学校、ベルリンのホッホシューレ(ベルリン国立音楽大学)に留学する。一旦帰国して後、1969年に西ベルリン市(当時)のベルリン芸術家プログラムの招聘により再びドイツに渡った石井は、かつて谷崎が述べた漢の創造の軌跡を追い掛けるかのように、ベルリンと東京に拠点を置き、東と西の音楽を対峙させ、あるいは融合させながら、時には雅楽や声明をも採り入れて、さらには東西の図式的な構図を乗り越えて、自己のアイデンティティを強烈に意識しつつ、創作における世界的な最前線に常に身を置きながら走り抜ける生涯を全うした。特に打楽器の用い方は巧みであり、20世紀の作曲家の中で最も優れた打楽器による多彩な表現を獲得した作曲家であると言っても過言ではない。

その創作活動範囲は作曲のみならず、現代音楽祭や音楽運動の企画・実施について恐れを知らぬ超人的な働きを成し遂げた。ベルリンでは「ベルリン芸術週間」の複数年にわたる日本特集に於ける企画やベルリン在住の各国の作曲家たちとの様々なプロジェクトを、北京では「日中友好合作現代音楽祭」を、また東京では「日独現代音楽祭」「パナムジーク・フェスティバル」「東京の夏」などの現代音楽祭の企画を行った。また、TOKK(東京音楽研究所)アンサンブルのプロデューサー・指揮者として、世界各国で日本文化を紹介した。例えば、1976年の9月から10月にかけての石井の海外での活動を追ってみよう。TOKKアンサンブルを率いてイラン、イギリス、ドイツ、ポーランド、スウェーデン、フランス、デンマーク、チェコを旅行し、10月3日ベルリン、23日ロンドンでは鬼太鼓座により



石井の作品「モノクローム」が演奏され、9月29日ケルン、10月12日～14日ベルリン・フィルハーモニーの定期演奏会で宮内庁楽部により「遭遇II」が演奏され、引き続きパリ、ロンドン、ヴェニス公演を行っている。石井のコーディネーター、プロデュースの力量に驚嘆せざるを得ない。このような力を発揮する資質はどこでどのように獲得したのだろうか。想像するに、彼が漢の“興行”としての舞踊公演活動を身近に見たこと、そしてある時には公演に同行した経験に、原点があ



工面のこと、そして「興行」は、その“藝術性”の目標を高く掲げながらも、観衆を楽しませなければならないということ、などである。石井は作曲においても、人づきあいにおいても、常に人々を楽しませ、喜ばせる企みを忘れていなかったと思う。

【石井眞木を育てた環境、そして『交響譚詩』】

多方面に才能を発揮した音楽評論家・秋山邦晴（1929～1996）のインタビューに答えて、石井にしてはめずらしく、自らが育った環境を語った記録がある。「夕食に、家族水入らずということは皆無。美術畑の人や、音楽家と一緒に、芸術論をナベ料理をつつきながらやる。」「ピアノもグランドピアノを含めて五台あった。漠が大陸（中国東北地方及び朝鮮など）巡業の折々に集めた打楽器や各種のめずらしい打楽器がたくさんあり、近所の子供たちとグランドピアノの上で打楽器を叩いたり、そのまわりで踊ったり・・・」「ダルクローズのリトミックを日本に広めた小林宗作さんと漠が親友で、彼が教えていた国立音楽大学附属中学に勧められて入学した。（註:小林宗作1893～1963）リトミック研究家・幼児教育家で、『窓際のトットちゃん』で有名になったトモエ学園の創設者）」「この頃からいろいろな先生の個人レッスンについて音楽の勉強を始めた。作曲を池内友次郎、指揮を渡邊暁雄、ヴァイオリンを鰐淵賢舟に。」「国立音楽大学附属高校を卒業した後に、漠に連れられて伊福部昭のところへ通うようになった。エンピツの削り方、譜面の書き方、管弦楽法を二年間みっちり習った。（註：兄・勲は、眞木の将来について漠といつも語っていたと証言している。ふたりは眞木の留学先の事も相談をしていた）」「日本の伝統音楽は、親父につれられて宮内庁の雅楽を見に行ったり、民族舞踊の関係で、日本の太鼓の音をはじめとする民俗音楽は、ベートーヴェン、ショパンと同じくらいの量を聴いていた。」（雑誌「音楽芸術」1973年5月号 音楽之友社）

また、石井は伊福部昭古希記念・交響コンサート（1984）のプログラムに「釈迦の手のひら」と題して、十代後半の頃の自身について触れている。「十代後半、私が最も多く聴いた作曲家の一人はく伊福部昭」である。親父の仕事の関係もあった。親父のために書かれた舞踊曲「さまよえる群像」は何度も公演でピアノ伴奏を弾いたし、管弦楽のための長大な舞踊曲「人間釈迦」は、まさしく“耳にたこができる”程聴いた。しかし“SP”（註：レコード）がすり切れるほど聴いたのは『交響譚詩』で、私のベルリン留学以前の習作には、これらの大きな影響がある。先生の門をくぐったのもこの頃で、お忙しい先生が何度も夜を徹して、私のつたない習作を見て下さった。この感激はいまだに忘れられない。～後略」

石井眞木は、上記インタビューと文章の中で、生涯の活動の原点と要を語っている。多様な打楽器あそび、ダルクローズのリトミック、雅楽、日本の太鼓、近代創作舞踊（バレエ）、伊福部昭である。



石井眞木 「交響的協奏曲」オーケストラのための（1958）

この作品は、1958年5月に完成された。二カ月後の7月、石井はベルリンに渡りベルリン国立音楽大学に入学することになる。この頃の石井の状況について秋山邦晴は著作の中でこのように述べている。「そのころ（註：国立音楽大学附属高校卒業後）大学へ進学もせずに、オーケストラ曲を二、三曲すでに作曲していたらしい。それらはストラヴィンスキー、ハチャトゥーリアン、プロコフィエフ、それに師伊福部昭の影響とが雑然とまじっているような作品だったという。こんなことをしていても駄目だと考えたとき、かれは父に留学の希望を話す。」（秋山邦晴「日本の音楽家たち」音楽之友社1978）石井は1956年に三管編成による「オーケストラのための 交響的“動”」という作品を作曲していて、上記の“二、三曲”は、この二つの作品のことでであると推測する。

「交響的協奏曲」はおそらく、ベルリン国立音楽大学の試験に向けた提示作品として作曲されたのではないだろうか。秋山の著述にもかかわらず、この作品はバルトークの「オーケストラのための協奏曲」に、題名及び曲想について直接的な影響を受けている。すなわち、オーケストラの各楽器に応分の活躍をさせること、序奏が低音部に乗った木管とトランペットのソロにより静かに徐々に展開されることや、コーダが十六分音符の弦楽器に始まる走句がじわじわとクライマックスを築くあたりである。中間部のフルートやチェロに、一瞬「オーケストラのための協奏曲」のフレーズが現れるのは、作曲家を志す真つつぐな22歳の若者の作品らしく微笑ましくもある。勿論、中にストラヴィンスキーの「春の祭典」や伊福部の手法も聴き取ることができる。

しかしそこには、はやくも強固な石井の個性が表現されている。非常に単純で機械的とも言える動機の積み重ねによって、“音響”を構築する技法、序奏部に出現する4/4拍子に6/8拍子や6/4拍子を組合わせるポリリズム、一定の固定リズムを徐々に細分化するリズム変奏などは、巧みにさはあるものの、アフロ・コンチェルトにも出現する。ティンパニの他に6人の奏者を擁して、全編に渡って活躍する打楽器の使用などは、師伊福部の最初の管弦楽作品「日本狂詩曲」が必要とする打楽器奏者9人には及ばないが大胆だ。

曲は、序奏とコーダを両端に据えた、三部形式で構成されている。初演：2013年7月14日　オーケストラ・ニッポニカ　指揮：野平一郎　紀尾井ホール
編成：pic,2fl,2ob,cor-l,2cl,b-cl,2fg,c-fg,4hr,3tp,3tb,tu,tim,6perc (bd,cym,sd,tri,tamb,t-t,wood-block,chinese-woodblock,claves,bongo,tamburo,tamburo-rullante,sleigh-bell),hp,弦楽5部
使用楽譜：スコア　明治学院大学図書館附属日本近代音楽館提供
パート譜面　オーケストラ・ニッポニカ作成

陳明志 《御風飛舞》In the memory of Ishii Maki (2013)

この演奏会のために、オーケストラ・ニッポニカが委嘱をした作品である。作曲者が作品の解説を寄稿して下さった。

20世紀90年代日本に留学していた時に、幸運にも石井眞木先生の創意と躍動感に溢れ、エネルギーな作品を聞くチャンスに恵まれた。その後石井先生にいろいろと教わり、先生が精力的に推し進める中日現代音楽祭などのイベントの企画準備を手伝う運びとなった。日本、中国、東南アジアの音楽と西洋音楽を融合させ、音楽の深遠なる境地を作り出そうとする先生の創作理念と実践精神は私にとって一生の財産となっている。先生が亡くなられて10周年の折、《御風飛舞》を作り、先生に捧げたい。

「風」は異なる地域の風土や音楽流派も意味する。《御風飛舞》は石井先生の音楽創作が異なる国の間にある音楽の境界線を越え、生命力に溢れ、自由に舞い上がることを意味する。曲は「序破急舞」の四つの部分に分かれ、日本の雲音階（ママ、註：陰音階か？）を基調とし、東南アジア音楽の色合いも取り入れている。曲の後半は石井先生の《漂う島》の四音音階及び90年代によく使われた固定音型の手法を借用し、民族情緒が漂う雰囲気の中で、尊敬なる（ママ）石井眞木先生を偲ぶ。（作曲者解説、以上）

陳明志は、それまで後進の指導にあたることを避けてきた石井が、長期的なヴィジョンのもとで「将来重要な役割を担うであろう人材を、自身の関わる音楽製作の現場に置き、多くを吸収させよう」という意図を持って交流した中国の作曲家である。秦文琛という作曲家も同様の交流を得た。陳は香港出身で、91年から日本で現代音楽を学んでいた。石井は1995年に東京で陳と出会い、翌年4月、石井が実行委員長となって開催した「日中友好合作日本現代管弦楽作品音楽会“東京の響き in 北京”」の際に陳を同行し訪中。陳の紹介によって、中央音楽学院作曲系の教授陣と交流の機会を持ち、そこに秦文琛も同席していた。ここでの出会いがきっかけとなり、石井と中国の作曲家の間で急速に親近感と信頼関係が芽生えた。（出典：司東玲美 アジアに新たな芸術音楽の世界を築く:石井眞木の抱くヴィジョン』『音楽芸術』1997年12月号 音楽之友社）

初演：2013年7月14日　オーケストラ・ニッポニカ　指揮：野平一郎　紀尾井ホール
編成：pic(持替),2fl,2ob,2cl,2fg,4hr,2tp,3tb,tu,4perc(tim,bd,s-cym,sd,tri,tamb,t-t,vib,xyl,5tom,5wood-block,maracas,bongo,2conga,sleigh-bell,日本太鼓),hp,弦楽5部
使用楽譜：スコア及びパート譜面　作曲者

石井眞木　ブラック・インテンションI　1人のリコーダー奏者のための（1976）

タイトルの「Black Intention」は特殊な音楽的意図を作品に織り込むという意である。「ブラック・インテンション」はその後シリーズとしてIV番まで作曲された。石井は、『『ブラック・インテンション』と『失われた響き』の二つのシリーズの作品群は、たぶん、西に振れたものの代表であろう。』と言っている。IからIVまで、いずれも演奏家の超絶技巧に触発されて作曲されたものである。この作品は、いまやオーケストラ古典音楽の指揮の巨匠となった、リコーダーの名手フランス・ブリュッヘンのために書かれ、また捧げられている。

一人のリコーダー奏者が、2種のソプラノリコーダーを同時に演奏したり、テノールリコーダーの特殊奏法（尺八奏法のイミテーション）に、声、銅鑼（Tam-Tam）が対位的に演奏され、重層的な音響を形成するなどの、特殊な音楽的意図「Black Intention」が織り込まれている。

作品に小節線は存在しない。冒頭で11個の動機が示される。その後動機は、乱数的に演奏され続けるが、2種のソプラノリコーダーが2度音程で同じ音形を吹き始める部分では冒頭の11個の動機が再現される。シャウトと銅鑼が鳴った後、「ブラック・インテンション」の真骨頂となる、声を出しながらリコーダーを吹き、同時に銅鑼を叩く部分が続く。このあたりでは、四分音を織り込みながら、冒頭第一番目と第二番目の動機、及び11個の動機の中から、八分音符二つで2度する跳躍する動機、及び同じく9度で跳躍する動機を使って展開する。やがて曲想は点描風に推移し、十二音技法を極めた石井らしく音列を逆行形、移高などの技法を駆使しながら、合間には第一と第二の動機が挿入される。最後は、2度と9度及び第一と第二の動機のみが繰返し奏されて最弱音で終息する。

初演：1977年3月12日　フランス・ブリュッヘン　ニューヨーク・メトロポリタン美術館
編成：soprano-rec,baroque-soprano-rec,tenor-rec,tam-tam
使用楽譜：全音楽譜出版社

伊福部昭　交響譚詩（1943）

1958年に出版された最初のスコアに、伊福部はこのように書いている。「第二次大戦中、蛍光質の研究に弊れた兄のために起稿し、1943年春に脱稿（札幌）したものです。戦争が次第に烈しくなり、大きな編成を採ることが困難な時代だったので、2管持ち替えの小さなものとなりました。その年の9月、ヴィクター管弦楽コンテスト（Victor Orchestral-contest）に入選、東京交響楽団、山田和男指揮によって録音されました（Victor,s.p.　文部大臣賞　1953年再発行）。公開初演は同年11月20日、日比谷公会堂において同じく東京交響楽団、山田和男指揮により行われました。」

第一楽章は拡大されたソナタ形式である。音楽は躍動感に満ちていて、大地を踏みしめるようなリズムと骨太な旋律、時折見せる抒情は北の大地に生きとし生けるものと自然への思いにあふれている。第二楽章は序奏と終結部を持つ三部形式で作曲されている。博覧強記の音楽評論家・片山杜秀が度々語っているように、この楽章は元来「日本狂詩曲」（1935）の第一楽章として作曲された「じょんがら舞曲」である。兄・勲はギターを良くし、弟・昭の為に「じょんがら舞曲」の浄書を手伝ったそうである。伊福部が「じょんがら舞曲」を「交響譚詩」の第二楽章として据えたことについては、非常な覚悟と綿密な設計があったはずである。単なる代替の楽章として用いるのではなく、「兄のために起稿」し「交響譚詩」と名付ける挽歌として既成の「じょんがら舞曲」を用いる必然性を追い求め、またその意義を込めた交響作品にしようとしたはずである。

事実、このような視点から第一楽章の構造を追ってみると、この楽章の中に「じょんがら舞曲」（第二楽章）の主要な動機や構成要素が用いられており、そのことで、第一楽章の躍動感あふれる音楽の中に、鮮烈な抒情を添える形で昇華された音楽が響いていることに驚く。そのような視点から、第一楽章の要の部分に絞って解説をしてみたい。①　第一楽章の第一主題は、「じょんがら舞曲」の第二主題と同じ構成要素で出来ている事。

第一楽章は、アウフタクトの強烈なテュッティ（全員での意）一発から開始され、いきなり第一主題（六小節）が提示される。木管楽器による推進力と躍動感にあふれた主題の冒頭二小節間の音階と、次の小節に聴こえる印象的なH音を合せると【D－E－G－A－H】の音階となる。この時弦楽器群は【A－E－A（oct.）－E】の分散和音を八分音符で刻む。一方、「じょんがら舞曲」の第二主題（練習番号59番からのフルートによる主題）は、最初の二小節間の音階は【D－E－G－A－B】であり、伴奏の弦楽器群は5度低くヴァイオリンが【A－D－D－A】、ヴィオラとチェロが【D－A－D（oct.）－A】の分散和音を十六分音符で刻む。しかし、表現されている音楽は静と動、正反対の性格を持っている。第一楽章の冒頭から「じょんがら舞曲」を第二楽章とする意志が漲っている。

②　第一楽章の第一主題に、「じょんがら舞曲」のコーダの動機がはめ込まれている事。

第一楽章の第一主題（六小節）は提示部と再現部の冒頭で、それぞれ三回連続して繰り返される。しかし、二回目と三回目に現れる第一主題には、「じょんがら舞曲」の終盤のコーダに現れる動機が引用され見事にはめ込まれている。仕組みとしては、曲が躍動感にあふれて始まったばかりなのに、もうそこには悲しさを歌う「じょんがら舞曲」の最後が垣間見えているということである。こんなに悲しいことはない。その部分は、第一主題が始まった“六小節”が奏された後、練習番号2番の三小節目からテュッティで、3/4、2/4、3/4という変拍子のフレーズが加わる。【D－E－C－D－（E）、D－E－C－D、E－D－H / E－D－H】という動きである。使われた「じょんがら舞曲」の動機は【D－C－A、D－C－A、D－E s－C－D】で、練習番号73番以降に現れる激しいテュッティである。第一主題の【E－D－H】を、一音ずつ下げるとコーダの【D－C－A】と同じ動きとびつたり重なる。且つ、第一主題の【D－E－C－D】は、コーダの【D－E s－C－D】に同じである。すなわち、引用元の「じょんがら舞曲」の後半4拍の動機を第一主題変拍子部分の前半に使用し、「じょんがら舞曲」の前半3拍二回の動機を第一主題変拍子部分の後半に使用しているのである。

③　第一楽章の展開部で、「じょんがら舞曲」の一場面が展開される事。第一楽章はソナタ形式である。古典音楽におけるソナタ形式の展開部は本来、楽章内の主題や動機が使用されて様々な表現の展開を見せる作曲家の腕の見せ所である。ところが伊福部は展開部に「じょんがら舞曲」の重要な和音及び音楽の一部分を印象的に展開させている。この音楽にある古典的形式よりも大切なものが、表現を形式からはみ出させたのである。　練習番号18番から展開部に入るが、練習番号21番に進むと突然にテュッティで五度の和音が、寺院の鐘のように三回鳴らされる。【G&D】音のベル・トーン（鐘の音）である。このベル・トーンは、「じょんがら舞曲」のヴィオラとクラリネットによる哀切な第一主題が歌い始められる時に、チェロとコントラバスによっ

て鳴らされ、第一楽章を想い起こさせるはずである。(更に「じょんがら舞曲」の楽章が進むとこのベル・トーンにはB音が加わって【G & B&D】、つまりG-Mollの悲しみの鐘の音が響く。)次にコーラングレが【A－G－A－B】を繰り返すオスティナートに乗って、第一ヴァイオリンがsul Gで楽章内の推移主題【F－E s－D－E s－D－C】を弾く。低弦は【D&G】音を静かに弾き、ティンパニーは【G－D－D－D】とリズムを刻む。荒涼たる大地の景色を想わせるこの部分は、「じょんがら舞曲」の第一主題の後に、第一ヴァイオリンが合いの手を入れる時の各楽器及び動機の組合せと、全く重なり合う(ティンパニーがハーブに置き換わる)。

④ 第一楽章の再現部で、「じょんがら舞曲」の動機が展開される事。第一楽章の再現部に入り、第一主題が三回繰返された後、一拍分突然の全体止となる。直後、チェロ、ヴィオラ、ソロ・ヴァイオリンが【A－H－C－H】と一音単位にカノンのように奏する。これも形を変えたベル・トーンであり、この部分の清冽で祈るような抒情性は曲中でもことに印象深い。この音の動きは、「じょんがら舞曲」の第一主題の音形【G－A－B－A】から取られている。この引用が、「じょんがら舞曲」の第一主題が哀歌であることを確実にしている。この時に低弦のバスとチェロが半拍ずれて開始するベル・トーンを弾いているのは勿論である。

⑤ 第一楽章と「じょんがら舞曲」のコーダの動機が同じである事。第一楽章のコーダ練習番号 54 番及び 55 番の部分【F－F－E－F】と、「じょんがら舞曲」のコーダ練習番号 74 の一小節前【E s－E s－D－E s】は、同じ音形の動機を用いている。第一楽章の最初と最後に「じょんがら舞曲」の動機を引用していることこそ、最初に述べた伊福部の覚悟を表している。

伊福部はこのようにも語っている。「作品を書くときに頭から考えていってはいけないということです。音楽に限らず時間芸術というものはすべてそうで、文学でも、例えばシェイクスピアの「ハムレット」では、最後にクライマックスがある。作家はそこが頭に浮かんだのであって、作家はそれを効果づけるために前の方に考えていく。もちろん書くときには、はじめから書き始めますが、時間的構築というものはそういう風にするということです。」

「交響譚詩」のクライマックスは第二楽章にある。

初演：(舞台初演) 1943年11月20日 東京交響楽団 指揮：山田和男 日比谷公会堂
編成：pic(持替),2fl,2ob,cor-l(持替),2cl,b-cl(持替),2fg,4hr,2tp,3tb,tu,tim,hp, 弦楽 5 部
使用楽譜：スコア及びパート譜面 音楽之友社レンタル楽譜

石井眞木 打楽器とオーケストラのための アフロ・コンチェルト ヴァージョン B (1982)

この作品の作曲及び初演の経緯について、初演時のプログラムに作曲者が執筆した解説があるので、これを掲載したい。

「アフロ・コンチェルト」は、元来、吉原すみれのために書かれた作品である。作曲されたのは1982年の夏だから、すでに2年半の歳月が流れたことになるが、今回は、吉原すみれによる初演になる。実は、これには少々わけがあつて、1982年の吉原すみれとNHK交響楽団による放送初演録音が、吉原すみれが病に倒れたため出演不可能となり、急遽他の2人の打楽器奏者とオーケストラのためのヴァージョン(A)で放送が行われたのである。～中略～ この協奏曲は、題名にもあるように、アフリカの土俗音楽の響きの魅力、執拗な反復がまきおこす呪術的な音世界に魅せられ、そこから大きな触発をうけて作曲されたものだ。実際に、この作品にはマリムバのルーツともいわれるアフリカの単純な音階をもつ民族楽器〈パラフォン〉も登場し、マリムバとともも重要なソロ楽器として活躍するが、さまざまな皮質の〈アフリカン ドラム〉が現代的な打楽器と複合して独特な音響世界を現出する。因みに、これらのアフリカの打楽器は、全て吉原すみれが現地から持参したものだ。構造的にも、短いメロディー、リズムなどには、アフリカ、例えばビグミー族の音楽の他いくつかの断片が用いられており、それらが、現代的な手法と複合しく執拗に反復)される。このように、この協奏曲では〈アフリカ〉が曲の内容と密接なかかわりをもっているのである。曲は1度目はマリムバ

+パラフォン、2度目は全独奏打楽器によって〈カデンツァ〉風に中断されるが、全体的には、ppp から fff までの息の長い、大きな〈クレッシェンド〉によって構成されている。(作曲者解説、以上)

この作品は、当初「ブラック・インテンションV」として発表された。基本的な拍子は、一小節が5/ 4+ 1/ 8拍子となっていて、最初から最後までこの拍子で貫く。八分音符換算で十一拍子。これは「ブラック・インテンションI」の基本動機数が11であることと符合する。小節の 中の最後の1/ 8拍子が不思議な感覚を与える。恐らく、超絶技巧を必要とする打楽器ソロ部分とこの十一拍という拍子が、主たる“ ブラック”な音楽的意図であろう。

また、石井が説明しているアフリカの要素にもう一点、追加の指摘をしておきたい。開始まもなく、5/4拍子の前半三拍分について、オーケストラの打楽器群は四分音符単位リズムを三つ刻む。これに重ねて、弦楽器群は附点四分音符単位で二つ刻む。後半の二拍分は、八分音符の三連音符を二拍分刻むなかで、三拍子系と二拍子系のリズムが維持される。

このように、二種のリズムが同時に進行していく構造を「垂直的ヘミオラ」と言い、ひとつの旋律の中で三拍子系と二拍子系のリズムが交互に入れ替わる構造を「水平的ヘミオラ」と言う。この独特の緊張感を生む様式を、民族音楽学では、ローズ・ブランデルの「アフリカのヘミオラ様式」という概念として定着している。

この作品は、この概念を上手く取り込みつつ、「ブラック・インテンションI」に通ずる11拍を合せて作品の基礎構造としている。生前の石井に作品について様々質問をした時に、度々返ってきた答えば秘すれば花なり。なんちゃってね。」(世阿弥風姿花伝)であった。初演：1985年1月25日 新日本フィルハーモニー 交響楽団 指揮：井上道義 打楽器：吉原すみれ 東京文化会館
編 成：2fl,2ob,2cl,2fg,c-fg,4hr,2tp,3tb,tu,4perc(bd,sd,2tamb,a-cym,maracas,t-t,gong,5s-cym,bongo,2conga,vib,xyl,glo),hp, 弦楽 5 部, 独奏 perc
使用楽譜：スコア及びパート譜面 リコルティ社(ミュンヘン)レンタル楽譜

作曲家 陳明志 (Chan Ming Chi) プロフィール
香港芸芸学院作曲系及び電子音楽系、(日本)国立東京芸術大学作曲系、(日本広島)エリザベト音楽大学音楽研究所にて、大学から哲学博士課程に至る音楽専門教育を受け、(中国)上海音楽学院で博士課程後期の作曲理論研究を修了。専門分野は現代音楽、マルチメディア、シアターピース、アジア民族音楽の創作及び研究。また、作曲、指揮及びコンサート企画、プロデュースの活動を行う。創作は主に管弦楽、室内楽及び、マルチメディアのシアターピース等で、これまでに1987年香港青年音楽家大奨、1991年香港青年作曲家グランプリ、及び最優秀演奏奨を受賞。また、1992年日本文化庁舞台芸術賞、1996年秋吉台国際作曲奨学賞、2008年全国音楽作品(合唱、室内楽)文華音楽作品創作優秀奨、2010年第一回 eARTS デジタル音楽コンテスト第3位等、多数の受賞歴がある。

その作品は度々国内外の現代音楽祭の上演作品に選ばれ、1995年、97年、2006年、07年に香港、東京、高雄、上海で全プログラムが自作作曲のコンサートが開催され、高く評価された。

近年は東洋の美学と哲学を創作の原点とするほかに、多元的な文化とその相互作用をテーマにマルチメディア音楽のシリーズを展開する創作活動を行っている。このシリーズの作品には「画家、フルート、舞踊のための～合流一色彩、テクスチャーと律動の対話」、「書家及び民族楽器合奏のための～墨気」、「映像と民族楽団のための～雨中尖東」、「インターネット、映像、舞台装置と混合アンサンブルのための～不可視的宇宙」、「照明、舞踊、ハーモニカ五重奏のための～座看雲起時」、「舞踊音楽～無極・舞極」等がある。

プロデュース及び電子音楽のジャンルでの活動には、1996年「ICMC国際電子音楽祭(香港)」でテクニカル・ディレクター、1998-99年「香港音楽新文化」コンサートのディレクター、2002年「2002世界現代音楽祭」芸術委員会委員、2003年「2003華人作曲家音楽祭」シンポジウム実行委員会主席、2000-2003年「国際作曲家フォーラム(国連主催)」香港代表、等がある。

これまでに香港芸術センターパーフォミング・アーツ部主任、香港中楽団レジデンス・コンポーザー、同指揮アシスタント及び研究員、香港ラジオの音楽芸術局編集及びキャスター、香港芸芸学院作曲・電子音楽系講師、台南芸術大学副教授、を務め、現在は上海音楽学院教授、Ensemble Contemporary Players 芸術監督を務める。これらの活動と並行し、作曲、音響デザイン、ミュージック・デジタル・メディア・アートの指導、研究及び創作を積極的に行っている。(翻訳/司東玲実)

寄稿



生前の石井眞木さんと活動を共にされた方、親交のあった方に、ご寄稿をお願いいたしました。(50音順、敬称略)

石井眞木の音楽

一柳 慧 (作曲家)

石井眞木は、私がかつとも長い間親しく付き合った友人の1人であった。私たちは単に友人というよりも、音楽と作曲上の同志と呼んだ方がふさわしい間柄であり、ドイツや日本での家族同士の付き合いも深かった。振り返ってみると、ずい分多くの内外の現代音楽のフェスティバルなどでいっしょに活動したことが思い起される。私達は、作曲家も曲を創るだけでなく、演奏やプロデュースやレクチャアなども行ってゆくことが大事である、という点でも一致した意見をもっていた。ベルリンやケルンを中心に何回も行なったドイツでのフェスティバル公演、その他オランダ・フェスティバルや、ロンドン、ストックホルム、ワルシャワの秋、また、ノルウェーオスロでのウルティマ・フェスティバルや、まだパーレヴィ国王が健在であったイランのシラス・フェスティバルなど多くの場所で、石井が指揮をし、私がピアノを弾いて共演した。石井は終生、ドイツと日本を往復しながら、日本とヨーロッパ音楽のかけ橋の役割を果たす中心的存在であった。それを裏書きするように、彼は日本の伝統音楽をよく研究し、それらに精通していた。そして、日本の作曲家としては珍しく、雅楽や聲明などの大型の作品や、また、日本の伝統楽器を独奏楽器に仕立てたオーケストラとの興味深い協奏的作品をいくつも作曲している。彼の没後、この種の作品に関心をもつ作曲家やプロデューサーが少なくなってきたのは残念であり、さみしくもある。

私が見るところ、石井は3つの分野の作品を書くことに特に秀でた才能をもっていたように思う。ひとつは今述べたように、多種の日本の伝統楽器を自在に使いこなし、その領域で西洋音楽と拮抗する独自の世界を確立したこと、もうひとつは日本のバレエの草分けであった父の石井漢ゆずりの優れた舞踊感覚に裏付けられたモダン・バレエやコンテンポラリー・ダンスの音楽の書き手であったこと。つい先日、イリ・キリアン舞踊団のために作曲した「カグヤ姫」がヨーロッパ各地で1ヶ月以上にわたって上演され、話題をよんだ。そして3つめは、楽音と噪音を同等の音素材として扱ったエネルギー的な打楽器音楽の作曲である。噪音を楽籠中のものとしたその多彩な打楽器の作品群は、石井が正に20世紀に生きた作曲家であった証しとして際立っている。このプログラムで演奏されるアフロ・コンチェルトも、まぎれもなくその代表作のひとつと言えるだろう。日本の場合、今回のオーケストラ・ニッポニカのような企画性の高いプロデュース公演が行われることは決して多くない。私は石井眞木のオーケストラ曲を、まともに生の演奏で聴けるこの貴重な機会をじっくり味わいたいと思っている。

コントラバスと真っ赤なイチゴ

伊福部極 (伊福部昭長男)

父が大半の時間を過ごし、お茶を飲んでいた書斎の椅子横に、テオルボが置いてありました。眺めては楽しみ、深夜にはそつと掻き鳴らすことも。このテオルボ、仕事帰りに銀座のヤマハで見かけたらしくどうしても欲しくて、ある日突然私と二人で購入に、母からは夕飯の支度を始めたから寄り道はしないで真っ直ぐに帰りなさいと、まるで子供のお使いの体。幸いまだ売れないでケースに陳列されており、



梱包をお願いして待っていた時の事です。お仕事でたまたま来店していたのか？石井眞木さんが足早に通り掛りました。そこは楽器売り場、丁度父の足元に色の濃い金属部分がピカピカのコントラバスが横にして置かれておりました。それを見るなり眞木さんが真顔で「先生、今日はこいつを買ったんですか？すごいなー」

タクシーの中で「眞木さんには参るなー、まだああいうもの欲しがると思われているのか、反省しないと」と。時が経ち、夕食時には帰宅するやうにとうるさく言っていた母が2000年の末に亡くなりました。その年が明けた、ある澄み切った青空の春の日の午後、石井眞木さんが自由が丘から自転車に乗って、真っ赤なイチゴを抱えて「お母さん死んじゃったけどみんな元気かな？」と突然あの笑顔で、玄関先にやって来てくれました。「お一粋だな、イチゴか」「良い酒飲みになった」とか「やはり石井漢の倅だ」とか訳の解らない事を言って喜んでいた父。あのコントラバスの眞木さん、真っ赤なイチゴの方が似合う様な気がしてなりません。

石井眞木さんのこと

小松諒悦 (元国際交流基金)

眞木さんと初めて会ったのは、1972年でした。当時、ぼくは、創立したばかりの国際交流基金公演課に勤務していました。眞木さんは、入野義朗さんと一緒に、73年の「伝統と現代音楽海外公演」への助成を要請にきたのでした。

TOKKの名刺を出しながら、それが、東京音楽企画研究所のことであると説明した時の、真剣でいながら、茶目っ気の混じった眞木さんの表情が懐かしい。生真面目そのものの入野さんと好対照でした。それは突拍子もない企画でした。二人の専門である現代音楽とモダンダンスだけではありません。青木融光真言宗大僧正中心の17名の僧侶による声明、井野川幸次検校による平家琵琶、鶴田錦史(琵琶)、横山勝也(尺八)など、どれ一つをとっても極めて特異な舞台です。それらをまとめて総勢34名という大公演団を編成するというのです。しかも、公演旅行は、1か月10日、テヘランを皮切りに、欧米加とほぼ北半球を一周する長丁場です。

あまりにも奇抜すぎて、実現性そのものすら危ぶまれました。そもそも、演者は納得しているのか。現地の主催者は。これほどに分野が異なり、かつそれぞれの分野の大物が、こんなにも長い期間、分解することなく同一行動をすることができるのか。移動が多く、公演そのものに間に合わないことが起きないのか。高齢の演者が多く、健康も心配でした。

当時、ぼくたちは、面白い企画を探していました。特に、日本の舞台芸術の特徴である伝統と現代の両面をバランスよく海外に紹介することを、一つの柱と考えていました。即決でした。ぼくの手元に、この公演団の各地での新聞評が載っている小冊子があります。反響の大きさが手に取るように見て取れます。結果として、歴史的な舞台になりました。これだけの舞台は、後にも先にもこの公演だけであったと思います。

こんな企画を誰が考えたのでしょうか。長丁場の公演期間中、一行をどうやってまとめたのでしょうか。今となると想像するしかありませんが、眞木さんの存在が大きかったことは疑いないでしょう。入野

さんとの二人三脚は絶妙でした。

基金公演課のもう一つの問題意識は、日本と海外のコラボレーションでした。75年、現代音楽とモダンダンスの日本・インドネシア・コラボレーションを、眞木さんの企画で実施しました。

ぼくは86〜90年に、ドイツツェルンの日本文化会館に勤務しました。眞木さんとの面白い企画は続いたのですでした。

にこにこしながら、真剣に説得する眞木さんに、いつの間にか快く乗っているのですでした。(公益財団法人渋沢栄一記念財団常務理事)

石井眞木さんとの思い出

菅原 淳 (打楽器奏者)
アフロ・コンチェルトを演奏したのは、2000年カナリア諸島での音楽祭でした。

アルブレヒト指揮の読売日本交響楽団との共演で、グラン・カナリア島とテネリフェ島で演奏し、その後ドイツに渡り、シュツットガルト、デュッセルドルフでも演奏しました。その最終日デュッセルドルフ公演の時には、石井眞木さんも聞きに来られ、一緒に食事をしたり、演奏の感想など話し合い、とても有意義で楽しい1日を過ごし、喜んでおられました。その後、日本でのコンサートでたまたま席が隣になり、アフロ・コンチェルトの話になり、私が、パーカッション・ミュージアムの演奏会のためにオーケストラの部分を打楽器アンサンブルに編曲をしたい・・・とお願いをしたら、石井眞木さんは「それはいい事だ。是非やって下さい」と約束をしました。それが私と眞木さんとの最後の言葉になりました。打楽器アンサンブルに編曲しだアフロ・コンチェルト」は2004年に紀尾井ホールにて、演奏することが出来、眞木さんには聞いて頂けなかったですが、多分喜んで満足されたことと思っっています。

私と石井眞木さんとの最初の出会いは、45年前、オーケストラ曲「響層」での打楽器パートを演奏した時でした。それ以来、オーケストラ曲、室内楽、国立劇場での声明公演など、いろんな演奏会でお世話になり、いつも熱い助言を頂きました。

私のリサイタル「シュトック・ハウゼンと石井眞木の響き」(1985年)では、新作を委嘱し、「サーティードラムス」の名曲が生まれました。その後ドイツのメック社より出版され、すぐに「サーティードラムス」がベストセラーになった・・・と自慢されていたのが今でも思い出れます。現在では、打楽器ソロ曲の定番となり、世界中で演奏される曲になり、とても嬉しいことであり、石井眞木さんに感謝しています。

石井眞木さんの思い出

高橋 アキ (ピアニスト)
「石井眞木さんから電話よ」という姉の声。学生だった私は、もちろんお名前は知っていたけれど直接の面識はなかったので、何事かとびっくりした。電話口に出ると、「日独現代音楽祭」という音楽祭で、武満徹と篠原真の作品を演奏してほしい、とのこと。「青天のへぎれき」いう感じだった。そしてその音楽祭が終わった3か月後の1968年5月には、眞木さんの「響応」のピアノパートの楽譜をNHKでの録音前夜、私がベートーベンのピアノ協奏曲を弾き終わったばかりの楽屋に届けにいらした。当時30歳を少し出たくらいだった眞木さんは、まだヒゲも蓄えておらず、髪も七三にきちんと分けている背の高い好青年だった。コンサートを聴きに来ていた私のクラスメートたちは、「素敵な人ねえ」と眞木さんを見上げて感心していたものだった。こうして眞木さんの曲も含め、さまざまな新しい音楽を次々と演奏していくうちに、1972年、また眞木さんから電話で「ベルリン芸術祭で二晩コンサートをしませんか」と誘われた。その年、私は音楽評論家の秋山邦晴と結婚したばかりだったので、二人でベルリンに出かけた。秋山と眞木さんは1959年にベルリンで出会って以来の親しい友人だったから、私にとって初めての、この外国旅行はとても楽しかった。それ以来、私たちと眞木さんは仕事以外でも楽しい時間を過ごすことが多くなった。眞木さんが中心になって活動していたTOKKアンサンブルで、洋楽と邦楽の演奏家たちといっしょにヨーロッパにツアーし、ベルリンのほかいくつかの都市でコンサートを開き、秋山は日本の現代音楽についてレクチャーしたこともあったし、また、「ブラック・インテンション3」という超絶技巧(!)のピアノ曲を私のために書いて

てください、ベルリンで初演をしたことなども懐かしい思い出である。

作曲をするだけでなく、若い時から熱心に日本の現代音楽を世界に紹介し続け、海外との交流に努め続けた石井眞木さん。その人間も、作品も、仕事振りも、実にスケールが大きく、しかも繊細さを併せ持った、例えようもなく大きな存在だった。

運命の「モノクローム」、「モノプリズム」

石井眞木さんが日本太鼓のために書いて下さった名曲「モノクローム」、この曲との出会いで、私の人生は一変した。初演は1976年2月、東京文化会館小ホール。七人の奏者中、打ち出しパートの私は、あまりの緊張で撥を持つ手のふるえが止まらぬまま演奏を始めたことを、今もはっきりと覚えている。

その年の7月には、アメリカのタングルウッド音楽祭で、小澤征爾指揮、ボストン・シンフォニー・オーケストラと太鼓協奏曲「モノプリズム」の世界初演を行った。「モノクローム」のオケ版とも言うべき曲だ。指揮に合わせるのもオケとの共演も初めてで、音楽的には素人同然の我々の演奏だったが、演奏が終わると、野外席も含む音楽祭の大観衆は歓声とともに総立ちになった。石井さんも小澤さんもこの成果に大喜びされ、リハから聞いていたレナード・バーンスタインさんも上気した笑顔で駆け寄り抱きしめて絶賛して下さいました。

もう37年前のことだが、私には昨日の夕食を思い出すよりも鮮やかな記憶だ。

その年の12月には東京でも演奏し、この曲はこの年の尾高賞を受賞した。望外の賞賛も嬉しかったが、私にとっては日本の太鼓で音楽表現や前衛的な表現ができたことの方が運命的だった。このような深い作品と出会えたのだから、自分は演奏家にならなければ、と思った。将来は美術家になるつもりだった若い私の人生は大きく変わった。

譜面に書かれたシンプルなりズム譜を、どう立体化して舞台音楽にするか、初演以降も試行錯誤の連続だった。奏法や演奏の所作を工夫し、響きが良くなるよう撥や台も自分で設計し、手作りしたり鍛冶屋に発注したりした。石井さんが亡くなる数年前、独奏者として歩む私に「モノクロームは英哲さんがいたから出来たんだよ」と言って下さった言葉が嬉しかったが、はからずも、それが石井さんとの最後の会話になった。

「モノクローム」は初演以来おそらく千回近く上演、太鼓だけによる唯一無二の現代曲の古典になった。それ以降も新曲で石井さんとのお付き合いは続いたが、大柄で豪放なキャラクターの反面、仕事は速く手書き譜面は実に几帳面できれいだった。料理も上手で、ベルリンの自宅で手料理をいただいたこと、空港の待合室でダンスのステップを踏むのがとても見事だったこと(父君は舞踊家、石井漠)、リハ途中で映画「ある愛の詩」のロマンチックな主題歌(作曲フランス・レイ!)をピアノで流麗に弾いて遊んでおられたことなど、思い出す場面はきりが無い。厳しい表情の時もあったが、あの見事な髭の奥で実に無邪気に笑っておられる笑顔は今も鮮やかに目に浮かぶ。

石井眞木作品、初演の思い出

1350万年前のサヌカイトの響きは、悠久の彼方より私達現代人に何を語ろうとしているのだろうか、とその音に浸って半世紀、私は石井眞木さんにサヌカイトとマリンバの為の作品を書いて頂けないだろうかと相談した。すると、今その楽器は何処にあるのかを尋ねられ、「四国香川県坂出市です」と答えると「良いですよ、直ぐサヌカイトの音を聞きにいきましょう」と即断即決の出会いだった。1987年10月「藤井むつ子マリンバリサイタル」を開催し、同年11月には、(当時)西ベルリンで行われた「インゼルムジーク14」に出演した。遙かな時を越え、サヌカイトが現代音楽の中で初めて鮮やかに蘇った瞬間でもあった。33分に及ぶ大作「琅琅の響き」は曲の後半からパイプオルガン(西ベルリンではアコーディオン)と録音しておいたテープ音が加わり、マリンバ音群と共に大音響のクライマックスを迎える。やがて余韻の長いサヌカイトの響きが一音一音ゆっくりと

消えながら曲は終わる。

またもう一曲の「飛天生動Ⅲ」では曲の説明に驚いた。「飛天生動Ⅱは衣を来た飛天が舞うけれど、Ⅲは違う。これは男の飛天なんですよ。」男の飛天とは何か?直ぐに敦煌莫高窟の壁画集を調べたが、そこには優美な飛天が描かれていた。三部から成るこの作品の最後は、奏者がアクティブなテクニックの限界に挑み、さらに激しい連打の応酬直後、一瞬にしてそのモチーフは消え去る。今顧みるに、この曲は類稀な舞踏家、石井眞木の父石井漠の壮絶な人生を果敢に舞った姿が描かれているように思う。それはまた、石井眞木自身にも重ね合わせることが出来るのではないだろうか。

リサイタルが終わり2週間が過ぎた頃、マネージメントの新井汎御夫妻と私は自由が丘の御自宅に招待された。全て眞木さんお手製のドイツ料理のフルコースを美味しいワインと共に堪能した。音楽に対する激しい情熱と心からのおもてなしを戴いて、忘れる事の出来ない豪快な笑いと笑顔が今も強く印象に残っている。玄関正面の額縁には、形相迫る石井漠が「囚われたる人」を舞っていた。

(以下、各演奏会プログラム内容)
「藤井むつ子マリンバリサイタル」石と木に挑むー石井眞木との出会い
1987年10月10日 石橋メモリアルホール
パーカッション:菅原淳、上野信一
オルガン:保田紀子
石の提供:前田仁(香川県)
マネージメント:㈱音楽事務所サウンドギャラー
1 マリンバシュトゥック―2人の打楽器奏者を伴った(1969)
2 飛天生動Ⅱ―2台のマリンバのための(1983)
3 飛天生動Ⅲ―ソロマリンバのための(1987)世界初演
4 琅琅の響き―石、木、メロディ楽器のための音楽(1987)世界初演
「インゼルムジーク14」
1987年11月20日 自由ベルリン放送局小ホール
マリンバ・サヌカイト:藤井むつ子
パーカッション:前金奈千子、石井敬アコーディオン:御喜美江
1 飛天生動Ⅱ―2台のマリンバのための(1983)
2 タンゴプリズム―独奏アコーディオンのための(1987)
3 飛天生動Ⅲ―ソロマリンバのための(1987)
4 琅琅の響き―石、木、メロディ楽器のための音楽(1987)

隠れ家の看板

船山隆 (音楽学者)
『輝夜姫(かぐやひめ)』は、後期の石井眞木の代表作である。まず1984年に邦楽器のための交響的組曲として発表され、バレエ・ヴァージョンは、1985年にスター・ダンサーズ・バレエ団によって、1988年にネザーランド・ダンス・テアター・バレエ団によって再演され、以後オランダ、ドイツ、フランス、日本で何度も上演され続けた。東京での公演をみそなった私は、石井に話すと、名古屋での公演を見にくるようにとのお願い。ステージは、評判とおりにすばらしいものだった。終演後は、白いタイツに身をくるんでいた素敵なおソロ・ダンサーに会いに行こうということで、名古屋の駅前でレンタカーを借り、ダンサーの待つホテルに向かう。しかしホテルはとても遠く、石井の運転は、見知らない町を走るのとは、まったく異なり、馴染みの道を猛スピードで走り抜けていく。そう、石井は人を騙すのが大好きな人間だった。2時間後に到着したのは、ダンサーとまったく無関係な、岐阜県郡上郡八幡町であった。石井は、この町中に水路の張り巡らされた美しい水の町に、ベルリンと東京の間の時差をとるために、ひそかに男の隠れ家を造っていたのである。

日本家屋の正面玄関入り口には、大きな看板が掲げられ、そこには、「流響」の二文字がくっきりと彫り込まれていた。石井は、この水と郡上踊の町の総合文化センターの柿落としのために、交響的祝典曲『流響』を作曲していたのである。

「流れゆく響き」というのは、石井眞木の音楽詩学の核心に他ならない。石井の作品表のなかで、「響」という漢字を使っているのは、『響応』『響層』『紫響』『失われた響き』『テトラトーンの響き』『音響詩』『響きの表象』など多数にのぼっている。もともと漢字の「響」は、「空気が風によって流れる音」を意味していたという。

石井の「流響」の音楽は、ある時は静かな高原の秋のかすかな風のにり、またある時はたけり狂う暴風のなかで、繰りひろげられるの

である。大胆さと繊細さが、矛盾無く同居している。男の隠れ家の「流響」の二文字は、石井の美学の本質を露呈していると言ってよいだろう。石井が裏の畑で丹精こめて作った野菜を中心にした朝食も、繊細にして豪快な男の料理だった。

石井眞木さんとピンポンと

南 聡 (作曲家)
私の場合、石井眞木さんとのお付き合いはもっぱらピンポンであった。1980年頃からであろうか。渋谷ムジカ・ピンポン・クラブと名乗る集まりでピンポンをやって、その後ビールをあおる。もしくはイタリアレストランに行ってスバゲティにワインでどんちゃん。音楽的な話あまり記憶がない(作曲信条に関してのやりとりが、最初の時に一度あったくらいだろう)が、とにかく愉快的日々であった。その愉快的気分は、もっぱら彼の茶目っ気あるキャラクターから生み出されていた。ある時、「中国のお土産」と言って、ピンポン仲間皆に陶器の破片を手渡してくれた。そこには、発掘場所と日時とともに「漢代陶片・発掘者:石井眞木」と書き込んだカードが添えてあった。「ホンモノ。でも、いっぱいそこらへんに散らばっているんだ」と笑いながら言う。後で同行の方から「ニセモノ。観光客用に毎回ばらまいてあるもの。それを嬉しそうに一生懸命ひろい集めているのよ」とそっと教えてくれた。その様子は見ていなくても、彼を知る人間には微笑ましい光景として目に浮かぶし、立派なカードを添えるあたりは面目躍如である。

晩年の2003年、北海道国際音楽家交流協会の招待で札幌を訪れた折も、お仕事の後は、まずは北海道の友人たちとピンポンを堪能。その後の宴席で、酔った勢いで「愛人が六人いる!」と言い放ち、その場の協会の皆さん、さもあらんと本気にして盛り上がりってしまったエピソードもある。「冗談のつもりで言ったのに困っちゃうよね…」とは後の弁だが、彼の輝かしい生命力の魅力が、皆を納得させてしまったのだろう。当人は病再発によって多分心悩ましい時期であっただろうにもかかわらず、である。

彼の音楽について、私が語れることはあまりない。しかし、それでも私は、彼の美質は「音楽的魅力」を本能的かつ直線的にわしづかみにするセンスにあると感じている。その結果、素材をこねくり回すことなく豊饒なエネルギーを放散させる「遭遇」や「サーティーン・ドラムス」のような興味深い作品を生んだと思っている。そして、それは彼のダイナミックなスマッシュを得意とするピンポンのスタイルと似ているのだ。

グルメ眞木さんの至福の時

山口 恭範/吉原 すみれ (打楽器奏者)
つい一週間前の5月28日、地元の行きつけの店で、二人で石井眞木さんの誕生日のカンパイをしたところです。

思い返せば我々は酒大好き人間で、かれこれ40年にわたり、事あるごとに、よく一緒に飲んだものです。恐らく僕にとっては最も頻繁にカンパイをした相手ということになるでしょう。

又、その場所も国内はもとより、恐らく行っていない国を数えた方が少ないと言える程、地球上の随所ではありました。

眞木さんは永らく、家族はベルリン、本人は自由が丘、という生活でしたので、我家(横浜)にもしばしば足を運んでくれました。眞木さんは名だたる食通で、特に蕎麦にはうるさく、自家製のめんつゆが常時、冷蔵庫で出番を待っていました。

我家でもっぱら和食が多かったけれど、自由が丘でしばしば集まった、誰かの誕生日とか、仕事の打ち上げ等のパーティーの際は、自ら台所に立たれ、それはそれは見事な本格ドイツ料理のフルコースでもてなしてくれました。

ただ、その際忘れられないのが、宴が終わって客人が帰り仕度を始める頃になると、毎回「皆さん、後片付けはしないで!」と一言。その訳は、皆が帰った後、眞木さん一人で洗い物をしているその時間こそが「至福の時」なのだそうです。

眞木さんは、そういう人です。今でもその息吹を感じます。眞木さん!喜寿ですね。



ニッポニカ設立の精神的支柱だった石井眞木先生

オーケストラ・ニッポニカ コントラバス奏者 門倉昭一

社会人になってすぐに、芥川也寸志先生が音楽監督だった新交響楽団に入団した。30年あまり前のことである。楽器を演奏するのはもちろん、次第に団の運営に深く係わるようになった。そして入団7年目には運営委員長を任せられたのだが、ちょうど芥川先生が体調を崩され、翌年亡くなるという大変な事態に直面した。団内でも議論を重ねていたが、音楽評論家の秋山邦晴先生のご助言もあり、石井眞木先生に相談してみようということになった。1990年夏のある日、東京文化会館のロビーで眞木先生と待ち合わせをした。同行するはずだった新響のもう一人がなぜか姿を現さず、私が単身、お会いすることになってしまった。「車だから」と眞木先生ご自身の運転で赤坂プリンスホテルまで乗せて行って下さり、食事をしながら相談することになる。「ぜひ新響を振って下さい」と私の申し出に対し、「もちろんだよ」と即座に快諾いただいた。その年の秋に行われたアマオケ連コンサートで、伊福部昭／「タブカーラ交響曲」を振って頂いたのが眞木先生との本格的な交流の始まりであった。翌1991年1月の新響130回では松村禎三／「前奏曲」、石井眞木／「解脱」、伊福部昭／「釈迦」というプログラムを指揮していただいた。眞木先生は先人たちの作品を演奏することも大事だが、現代の邦人作曲家の作品も積極的に演奏して行こうと提案されたのであった。さらに翌1992年の新響135回では「広く作品を公募しよう」との企画をご提案いただいた。日本全国から30を超える作品が集まり、夏田昌和氏の「モルフオージェネシス」が入選した。眞木先生は音楽大学などで継続的に教鞭をとることはなかったはずだが、一方で後進の育成には熱い想いも持っておられた。入選した夏田氏に自ら作品を振るように仕向けたのも眞木先生である。翌1993年秋には新響をベルリン演奏旅行に連れて行って下さった。藤田正典／「輪廻」、伊福部昭／「ラウダコンチェルタータ」、石井眞木／「浮遊する風」を日本がテーマのベルリン芸術週間の一環としてフィルハーモニーにて演奏した。翌日の現地新聞各紙できわめて好意的な記事が多数掲載された。また、この時のライブ録音より藤田作品と石井作品が日本コロムビアより市販CDとして発売され、「レコード芸術」誌の特選盤に選ばれている。

この演奏旅行のあと、しばらく眞木先生に新響を振って頂く機会がなかったのだが、先生との交流はずっと続いていた。海外におられる先生からたびたび絵葉書を頂戴し、日本に帰ったら酒席をと誘いをいただいたことは一度や二度ではなかった。その席はご自宅近くの居酒屋「おかしゅう」と決まっており、必ず魅力的な演奏会企画を用意してくださっていて、毎回恐縮しきりであった。実は当時の新響にはいろいろな考え方が生じており、結果として眞木先生の期待になかなか応えられなくなっていたのである。それでも2001年に「伊福部昭

米寿記念演奏会」のご提案をいただいた時は、何とか新響も団内がまとまり演奏会が実現の運びとなった。演奏会直前の2002年5月には茨城県鹿島市でその準備のためのリハーサル合宿があり、眞木先生にも全日程ご参加いただいた。毎晩、先生を囲んでの楽しい宴会で、合宿最終日は私の車で先生を自由が丘のご自宅までお送りし、近くの居酒屋でまた宴会という実に贅沢な時間を一緒にさせて頂いた(下の写真はその時のもの)。

その記念演奏会のあと、私は新響を離れる決心をし、邦人作曲家の作品を集めて演奏するオーケストラを新たに作りたくて、十数名の仲間とともにニッポニカ設立に参画した。眞木先生には「本当に実現できるの」とずいぶんご心配をお掛けし、また数々のご助言も頂戴した。いわばニッポニカ設立の精神的支柱のおひとりであった。2003年2月のニッポニカ設立演奏会にはもちろん駆けつけてくださり、激励のお言葉を頂いた。そしてちょうどその頃、眞木先生よりニッポニカ中国公演の企画をご提案いただいた。そもそも眞木先生は1996年より中国の作曲家や演奏家の方々ととの交流を幾度も重ねておられ、2002年11月の北京でのコンサートの際、「2004年には、我々の共通命題『古楽同源・新楽共創』を掲げた音楽祭を再び実現させよう」と、中国の方々とすでに詳細に立案されていたとのことだった。2003年3月9日の自由が丘での我々との打ち合わせの別れ際に「どんなことがあってもこの企画をやり遂げてね。約束だよ。」と言われたのがお目にかかった最後であった。眞木先生の悲報を聞くこととなるのはその1ヵ月後である。ニッポニカは眞木先生の「古楽同源・新楽共創」の遺志を継いで2004年10月に中国・北京で、次いで2007年11月にベトナム・ハノイで、さらに2013年2月にはフィリピン・マニラで海外公演を行って来た。そのマニラ公演に、ご長男の石井敬さんから「持っていて下さい」と託された眞木先生愛用の指揮棒をスーツケースに忍ばせて行って来たばかりである。



ニッポニカが行った古楽同源・新楽共創の軌跡

石井眞木企画原案 古楽同源・新楽共創 第2回日中友好合作現代音楽祭 in 東京 / 北京 2004

- 2004年10月3日(日) オーケストラ演奏会1 (東京・紀尾井ホール)
- 10月4日(月) 講演会1 (東京・けやきホール)
- 10月5日(火) 室内楽演奏会1 (東京・台東区ミレニウムホール)
- 10月8日(金) 室内楽演奏会2 (北京・中央音楽学院)
- 10月9日(土) 講演会2、室内楽演奏会3、日中音楽交流フォーラム (北京・中央音楽学院)
- 10月10日(日) オーケストラ演奏会2 (北京・中山公園音楽堂)

- <室内楽演奏会1・2・3>
- 石井 眞木:「ブラック・インテンションI」～1人のリコーダー奏者のための～Op.27 (1976)
- 「人間如夢Ⅲ～二胡とピアノのための」Op.121(2001)
- テノール・リコーダーのための「東・緑・春」Op.94(1994)
- 「飛天生動Ⅲ」Op.75(1987) マリンバ独奏
- 陳 明志:バスリコーダーと打楽器のための「樹(き)は静を欲すれど風止まず…」(2004)
- ゲラルド・エッカート:グレートバスリコーダーのための「NEN III (2004)

- 藤田 正典:中国琵琶と打楽器のための「砂丘の彼方へ」～今はむぎ石井眞木に捧ぐ～(2004)
- 南 聡:「星辰/擬態」中国琵琶のための op.49-3 (2004)
- 陳 怡:「点」中国琵琶独奏 (1991)
- 周 龍:「緑」中国横笛と中国琵琶のための (1984)
- 篠原 眞:「フラグメンテ」～リコーダーのための(1968)
- 湯浅 譲二:「テナーリコーダーのためのプロジェクト」(2004)
- アネット・シュリュッツ:「La faux de l'été」(リコーダーと打楽器) (1991)
- 向 民:「舞雩二」～2人の打楽器奏者と1人の中国琵琶奏者のための(2003)
- 出演:グードゥーラ・ローザ(リコーダー)、藤井 はるか・孟 曉亮・劉 剛・王 以東(打楽器)、蔣 婷・趙 潔(中国琵琶)、藤井 むつ子(マリンバ)、孫 鳳(二胡)、朝岡 聡(10/5 司会)

- <オーケストラ演奏会1・2>
- ボリス・ブラッハー:「バガニーニの主題によるオーケストラ変奏曲」Op.26 (1947)
- 唐 建平:「倉才一2003年を記念して」打楽器のための協奏曲 *1
- 秦 文琛:「風月送響」リコーダーと中国笙とオーケストラのための(2004) *2
- 石井 眞木:「アフロ・コンチェルト」打楽器とオーケストラのためのOp.50 (1982) VersionB*3
- 出演:本名 徹次(指揮)、張 景麗(打楽器) *1、グードゥーラ・ローザ(リコーダー) *2、董 穎(中国笙) *2、藤井 はるか(打楽器) *3、オーケストラ・ニッポニカ(管弦楽)

- 古楽同源・新楽共創 日越友好合作現代音楽祭 2007
- 2007年11月22日(木) 室内楽演奏会(ハノイ・フランス文化センター)
- レクチャートーク:ベトナムの作曲家を交えて / Vu Nhat Tan, 石田 匡志, 小沼 純一(司会)
- 芥川 也寸志:譚詩曲 *1
- 石田 匡志:「断章」:弦楽四重奏のための *2
- 石井 眞木:失われた響き・I *3
- Vu Nhat Tan:雨季:弦楽四重奏のための *4
- 出演:深山 尚久(Vn) *1,3, 三輪 郁(Pf) *1,3, Hoa Sen Vietnam String Quartet(弦楽四重奏) *2,4

- 11月24日(土) オーケストラ演奏会(ハノイ・オペラハウス)
- 早坂 文雄:左方の舞と右方の舞
- 武満 徹:ノヴェンバー・ステップス *

- 藤田 正典:オーケストラのための「いにしへの飛鳥へ」
- 今井 重幸:オーケストラのための「仮面の舞」第5番
- Do Hong Quan:オーケストラのための「Tro mot」
- 出演:本名 徹次(指揮)、中村 鶴城(琵琶) *、柿塚 香(尺八) *、オーケストラ・ニッポニカ(管弦楽)

古楽同源・新楽共創 日本・フィリピン友好合作現代音楽祭 2013

- 2013年2月8日(金) 室内楽演奏会(マニラ・Philam Life Auditorium)
- 芥川 也寸志:ラ・ダンス (1948) *1
- <インタビュー>お話し:M.P.MARAMBA, H.G.RANERA、久保 禎、石田 匡志 通訳:柿沼 美紀
- Francisco SANTIAGO:NOCTURNE in Eb MINOR *2
- 石井 眞木:ピアノ曲・北・銀・夜(冬) 作品93 (1991) *3
- Francisco BUENCAMINO: Marigayon Bati (Birthday Greeting) *4
- Hal GOODMAN: Woodwind Boogie *5
- Astor PIAZZOLLA: Violentango *6
- 武満 徹:アントゥル＝タン オーボエと弦楽四重奏のための (1986) *7
- 久保 禎:弦楽四重奏曲「哀歌」(2012) 委嘱作品 *8
- Manuel P.MARAMBA: String Quartet (2013) 委嘱作品 *9
- 出演:平原 あゆみ(ピアノ) *1-4, 柴山 洋(オーボエ) *7, 木管四重奏: Rosemarie POBLETE (Flute), Ariel Sta ANA (Clarinet), Jose Jerry SAMONTE (Bassoon), Ernani PASCUAL (Horn) *5,6, 弦楽四重奏 I: 浜野 孝史 (ViolinI), 小宮 直 (ViolinII), 伴野 剛 (Viola), 西山 健一 (Cello) *7,8, 弦楽四重奏 II: Dino Akira DECENA (Violin I), Joanna Ruth LIVIOCO (Violin II), Joy Allan de La CRUZ (Viola), Herrick ORTIZ (Cello) *9

- 2月9日(土) オーケストラ演奏会(マニラ・フィリピン文化センター大ホール)
- 石井 眞木: 祇王(陰影の譜) ～横笛独奏とオーケストラのための交響詩 作品60 (1984) *
- 石田 匡志: 交響曲第1番 (2012) 委嘱作品
- Herminigildo G. RANERA: Philippine Symphonic Folksongs (2012) 委嘱作品
- Antonino R. BUENAVENTURA: By the Hillside (1941)
- 伊福部 昭: シンフォニア・タブカーラ (1954/79)
- 出演: 下野 竜也(指揮)、西川 浩平(横笛) *, Irene V. Quiso-Ednave (ソプラノ) *, オーケストラ・ニッポニカ(管弦楽)



ジャパンパーカッションセンター

コンサート・パーカッションから民族楽器、ドラムセットまであらゆるパーカッションが勢揃い。J・P・Cはパーカッションの宝島。

2F **ドラム・シティ**

壁面いっぱいのスネアドラムとシンバル、フロアを埋め尽くす迫力のドラムセット。スティック、ヘッドなど充実の消耗品たち!そして、確かなスキルと豊富な経験を持つスタッフが、あなたにとって最高の楽器を選ぶお手伝いをいたします。



ドラマーのための快適空間! 音づくり自由自在!!

3F **エスニック・シティ**

JPC3Fには文字通り、世界各国の打楽器が所狭しと並べられています。さらにそれぞれの種類も豊富!コング1つとってもリーズナブルなものから最高クオリティのものまで勢揃い! お好きなものを選びます。楽器としてではなく、アクセサリやインテリアとして楽しめるアイデアも盛り沢山!



エスニック・シティは隠れんぼ大好きおもち箱!!

5・6F **パーカッション・シティ**

パーカッション・シティにはおなじみのコンサートパーカッションが勢揃い!!カスターネット、トライアングル、タンバリンなどの小物からグロッケン、マリンバ、ティンパニなどなどすべて試奏OK。マレットも300種類以上の中から好きなタイプを選びます。楽譜やCDも豊富に取り揃えています。



コンサートパーカッションが試奏できるパーカッション・シティ!

Japan Percussion Center

ジャパンパーカッションセンター

〒111-8567 東京都台東区西浅草1-7-1 コマキビル 営業時間/11:00～20:00

<http://www.komakimusic.co.jp/>

●東京メトロ銀座線田原町駅徒歩1分 ●都営浅草線、TX浅草駅徒歩5分 ●都営大江戸線蔵前駅徒歩7分 ●タクシー・上野駅より5分



コマキビル

50F **パーカッション・シティ** 03-3845-3041

3F **エスニック・シティ** 03-3842-6042

2F **ドラム・シティ** 03-3842-6044



JAPAN PHILIPPINES FRIENDSHIP CONTEMPORARY MUSIC FESTIVAL

マニラ演奏旅行のご報告

河野 航 (オーケストラ・ニッポニカ ヴィオラ)

オーケストラ・ニッポニカは、2013年2月、フィリピン・マニラにて「古楽同源・新楽共創」日本・フィリピン友好合作現代音楽祭をフィリピン文化センター (CCP) と共同で開催いたしました。

今回の企画は、文化庁の国際芸術交流支援事業として、また外務省の日本・ASEAN 友好協力 40 周年記念事業として採択され、日本・フィリピン両国大使館をはじめとする諸方面からの多大なご支援も賜り、実現にこぎつけることができました。

マニラでの演奏会は、室内楽演奏会とオーケストラ演奏会の2公演を開催いたしました。2月8日(金)に Philam Life Auditorium にて開催された室内楽演奏会は、平原あゆみさんの華麗なピアノ独奏により幕を開け、日本・フィリピン両国の弦楽器・木管楽器による室内楽曲の競演が繰り広げられました。中でも、久保禎氏による『弦楽四重奏曲「哀歌」(2012)』と、現役の神父であるマランバ氏による『String Quartet 2013』の2曲の委嘱作品は、両国の音楽の特色をもつ個性的な作品で、オーケストラメンバーを含む聴衆はその世界に惹き込まれました。

室内楽演奏会では、今回の音楽祭において委嘱作品を手掛けた、日本とフィリピンの作曲家4名の対談も行われたほか、アンコールでは日本とフィリピンの弦楽四重奏メンバーにオーボエの柴山洋氏を加えた9名で、フィリピンの民謡を奏で、文化交流に花を添えました。

2月9日(土)には、フィリピン文化センター大ホールにて、下野竜也氏の指揮によるオーケストラ演奏会を開催しました。「古楽同源・新楽共創」の企画の生みの親である石井真木氏の『祇王(陰影の譜)』に始まり、西川浩平氏の横笛とアイリーンさんのソプラノがその厳粛な世界を表現しました。続く委嘱作品である石田匡志氏の『交響曲第1番(2012)』では氏の音楽が持つ雄大さに心打られました。続くレネイラ氏の『Philippine Symphonic Folksongs』も委嘱作品ですが、この曲にはフィリピンの民謡の断片が多く埋め込まれ、聴衆の心をつかむことができたようで、客席からは鼻歌も時折聞かれました。続く『By the Hillside』もフィリピンの作曲家ブエナヴェンツラ氏の作品ですが、氏は20世紀のフィリピン音楽界を導いてきた著名な音楽家で、その曲の持つ美しい情景は東洋の真珠と呼ばれたフィリピンの風景を想い起こしました。

そして、メインプログラムである伊福部昭作曲『シンフォニア・タプカーラ』です。伊福部作品の持つエネルギーと、指揮の下野氏の魔術的なタクトにより、奏者と聴衆が一体で最高潮を迎え、スタンディング・オベーションとなりました。

アンコールでは、フィリピンのみならず日本でもよく歌われたフィリピンの歌謡曲『Dahil Sa Iyo』を演奏しました。題名は日本語で「君ゆえに」…私たちの友好を望む気持ちを、フィリピンの聴衆の皆さまに届けることができたでしょうか。

実は、フィリピンにとって「2月」という月は、日本との関係において目を背けることができないことがある月です。

1945年2月から3月にかけて、当時マニラを支配していた日本軍と、連合軍の中心であったアメリカ軍との間で、マニラでの市街戦が

ありました。市内にフィリピン人市民が70万人いましたが、10万人の市民が犠牲となったほか、大学、教会などの歴史的遺産も多くが失われました。その中で、日本軍による市民の虐殺があったとも言われており、現在でも市民にとって、2月はそのような痛ましい記憶を伴う月とされています。フィリピンでこの音楽祭の開催が発表されると、「なぜこの時期に日本との友好なのか」との抗議がCCPに寄せられたほどです。そのような中、この音楽祭の開催に漕ぎ着けることができたのは、この音楽祭が両国の国際理解と友好を深める今日的な意義のある催しであるということ、当地の新聞にて意見表明してくださったプレジデントのスニコ氏を中心としたCCPの力添えがあったからに他なりません。オーケストラ演奏会においても、その冒頭で両国の国歌を演奏した後、20秒間の黙祷を行いました。

ニッポニカは歴史の真偽などについて特定の立場をとるものではありませんが、かの如くの歴史的記憶が残る中で、スタンディング・オベーションを頂いたということについて、深く感銘を受けるとともに、芥川也寸志先生の「音楽はみんなのもの」という言葉を想起し、その持つ力を改めて実感したものです。

ツアー中の移動のバス車中などで、現地の添乗員の方とも多く話をする機会を持つことができました。当然のことですが、歴史についてのガイドの中で、マニラ市街戦の話題に触れることもありました。その時に添乗員の方がおっしゃった「戦争なんだからしょうがない。あなたたちには何の責任もないのです。」という言葉には、単に「寛容」という言葉では表現しきれない意味が感じられ、今でも私の胸に残っています。

真冬の日本から出発し、現地は乾季で気温は30度の中、誰もコンディションを崩すことなく、演奏会を無事に終えることができました。今回の私たちの取組みが、両国の友好関係や交流に少しでも力になれたのであれば、これ以上の喜びはありません。

掲載写真撮影は小島竜生氏

上左：オーケストラ演奏会の一コマ
上右：室内楽演奏会の一コマ (両国のカルテットにオーボエの柴山洋氏を加わってアンコールを演奏しました)
下：CCP代表 スニコ氏 (ニッポニカからの贈り物の熊手とともに)



マニラ公演 協力者一覧

*主催、共催、助成事業名は除きます。

■後援

在日 フィリピン共和国大使館

在比 日本国大使館

南日本放送 (鹿児島)

マニラ新聞

マニラ日本人会

フィリピン日本人商工会議所

■協力

フィリピン航空日本支社

(株)グローバルユースビューロー

WCL SOLUTIONS(PHIL.)CORP.

堤 嘉延

園原 茂

■特別協賛

API 東京打楽器レンタルサービス

キャピタル アセット マネジメント株式会社

荒田 敬道

■協賛

加藤 隆久

児玉 慶三

柴田 妙子

白石 かず子

高桑 マサトシ

高桑 ムツブ

田上 洋人

武井 勇二

都河 和彦

堤 嘉延

西川 浩平

廣瀬 一字

松本 正雄

森部 茂

その他

フィリピンナショナルバンクの口座へ振込んで下さった方々(姓名不詳)

ありがとうございました



左上：室内楽演奏会 (ピアノ 平原あゆみ氏)
左中：レクチャートークの作曲家の面々 (左から、レネイラ氏、石田 匡志氏、マランバ氏、久保 禎氏)
左下：室内楽演奏会の様子を紹介する現地日本語紙「マニラ新聞」

右上：オーケストラ演奏会に先立ち両国国歌を立奏した
右中：祇王の横笛ソリスト西川 浩平氏

下左：指揮の下野 竜也氏を中心に、作曲の2氏
下中：リハーサルには、作曲家も立ち合った (作曲家のレネイラ氏と打ち合わせをする下野氏)
下右：演奏会後のレセプションにて(在フィリピン日本大使ご夫妻と下野氏)

